



KIWC newsletter

CONTENTS

冬のエコツアー2010	1	日本のラムサール登録湿地18	3
環境保全イベントへの参加	1	JICA(国際協力機構)関連の事業	4
KIWC技術委員会の活動	2・3	お知らせ	4
環境問題セミナーの共催	3		



世界湿地の日記念「冬のエコツアー2010」の実施

世界湿地の日(毎年2月2日)を記念し、2010年1月31日(日)に、地域住民を対象とした「冬のエコツアー2010」を実施しました。ツアーの参加者とスタッフあわせて26名で、釧路市のラムサール登録湿地のひとつである阿寒湖を訪れ、湖畔に広がる森や結氷した湖上を散策しました。

阿寒湖は阿寒国立公園の中にある標高420mのカルデラ湖で、北海道の中でもとりわけ冬の寒さが厳しい所ですが、参加者は膝上まで積もった雪をかきわけながらエゾシカやエゾリスの足跡をたどったり、冬枯れの植物を観察したり、疲れを忘れて楽しんでいました。湖畔の遊歩道沿いに開いたボッケ(泥火山)周辺は厳冬期にもかかわらず地熱により積雪もなく、地面に素手で触れた温かさや、コケがみずみずしい緑に成長している様に、参加者から驚きの声があがっていました。

散策の後は、温泉熱を暖房に利用している市の多目的施設「まりむ館」に移り、阿寒湖畔で参加者達が「見つけたもの」を題材にビンゴゲームを行いました。

2010年の世界湿地の日のテーマは「湿地と生物多様性・気候変動」ですが、生物多様性の宝庫である湿地が近年、気候変動をはじめ人間活動により環境が悪化しつつある現状をふまえ、湿地に対し「思いやり」を持つことが大切であると呼びかけています。湖・河川や森林、火山などがおりなす多彩な環境の中に、マリモをはじめとする貴重な動植物が多く生息する阿寒湖で行われたこのツアーは、世界湿地の日のテーマを皆で考える大変よい機会となりました。



環境保全イベントへの参加

2009年度も、湿地を含む環境保全の推進を目的としたさまざまなイベントが開催されました。KIWCではこれらのイベントに参加し、ブース展示等を通じて、釧路地域の湿地の自然や保全のための取り組みなどを紹介しました。

エコライフ・フェア2009「湿地の恵み展～ラムサール条約湿地の観光と物産(主催: 環境省)」

2009年6月6日(土)、7日(日)、環境省の主催で東京都の代々木公園で開催されました。会場の一角に設けられた、ラムサール条約登録湿地関係市町村会議などの共催によるブース「湿地の恵み展～ラムサール条約湿地の観光と物産」に、KIWCもポスターやパンフレット、環境教育キット等を掲示・配布し、釧路地域の登録湿地の自然や観光、保全活動などをアピールしました。

くしろエコ・フェア2009 in遊学館(主催: くしろエコ・フェア2009実行委員会)

2009年6月6日(土)・7日(日)、釧路市こども遊学館で開催され、親子づれなど多くの市民が地域の環境保護団体の展示ブースや工作体験などを楽しみました。

KIWCは釧路湿原自然再生協議会・再生普及行動計画ワーキンググループの一員として参加し、「タンチョウ・オオハクチョウ紙飛行機」製作キットを出展しました。

環がまちフェスタ2009(主催: 釧路市、くしろエコ・フェア実行委員会主催)

2009年9月26日(土)、釧路市観光国際交流センターで開催されました。環境保護団体やボランティア団体によるブース展示や「環境カルタ」大会、講演、ミニコンサートやショーなどさまざまな環境関連の催しが行われ、幼児から年配の方まで多くの市民が来場しました。

KIWCは「タンチョウ・オオハクチョウ紙飛行機」製作体験コーナーや、活動紹介ポスター、姉妹湿地・豪州ハンター河口湿地に住む市民の手作りキルト作品を出展しました。





技術委員会関連の活動

KIWC技術委員会では2007～2009年度の調査・研究のテーマを「湿地生態系にかかわる外来種」と定め、湿地や生態系の専門家9名に委員を委嘱し、釧路地域でみられる外来種に関する調査や普及啓発活動を行ってきました。

ミンク調査の実施

「湿地生態系にかかわる外来種」に関する調査研究活動の最終年度となる2009年度は、北米原産のアメリカミンク(特定外来生物)に着目し、釧路地域のラムサール登録湿地(釧路湿原、厚岸湖・別寒辺牛湿原、霧多布湿原、阿寒湖)とその周辺におけるミンクの生息状況や、かつて周辺地域に点在していたミンク養殖場の情報等を収集するため、5月から11月にかけてアンケート調査を行いました。

4湿地で活動する自然保護団体や鳥獣保護員、観光業者などに対し479通のアンケートを配り、221通(目撃情報472件)の回答を得ました(回答率約46%)。



ミンク調査からわかったこと

地点の分布や目撃時の状況などから、釧路湿原、別寒辺牛湿原の河川沿いや、阿寒湖周辺ではほぼ全域にミンクが生息し、この地域の生態系の一員として、様々な種類の生物(餌となる小動物など)と深い関わりを持っていることがうかがえました。

【ミンクの認知度】

アンケートの結果から、約80%の回答者が自然観察や仕事、釣りなどのため調査対象の湿地に行く機会があり、さらに同じぐらいの割合で、ミンクの姿かたちをイメージできる、またはそれ以上によく知っているということがわかりました。

また、60%が実際に野生のミンクを見たことがあると回答し、釧路地域のラムサール湿地と何らかの係わりのある人々にとって、ミンクが比較的身近な生物であることがうかがえました。

【目撃されたミンクの様子】

アンケートでは、川を泳いでいるところや、食事中的のミンクが目撃情報が特に多く寄せられました。中でも、同じく特定外来生物に指定されているウチダザリガニをミンクが食べている姿が多く目撃されています。その他、魚やヘビを食べているところや、マガモのヒナを追いかける様子、自分の体よりも大きなアオサギを食べていた例なども報告されました。

集まった目撃例の中には、死んだミンクも含まれていました。ほとんどの死因は交通事故か溺死で、交通量の多い道端や、魚やエビ・ザリガニ捕獲用に仕掛けた網の中などで見つかっています。



【ミンクによる被害】

目撃例とあわせて、地元のサケマス孵化場や養魚場、漁協からは、ミンクによる漁業被害の情報も寄せられました。生簀の中の魚を食べられるだけでなく、魚網を破られる被害についても報告がありました。このほかに、鳥小屋に入り込んでニワトリを襲った例もありました。

釧路地域のラムサール湿地とミンク

地域には自然豊かな河川や湖沼が多く存在します。なかでも釧路湿原、阿寒湖、厚岸湖・別寒辺牛湿原、霧多布湿原はタンチョウやイトウなどの希少種を含む野生動植物の宝庫であり、国際的に重要な湿地として、ラムサール条約に登録されています。

ミンクにとって釧路地域は原産地の北アメリカによく似た冷涼な気候のおかげで、餌となる生き物が豊富で、大変暮らしやすい場所です。

もともとこの地の水辺に住み、魚や小動物を餌としていた、ミンクより大きいイタチ科のニホンカワウソがすでに絶滅してしまっていたことも、ミンクにとっては好都合でした。

水陸どちらでも狩りができ、繁殖力も強いミンクが侵入すると、餌となりうる生物(タンチョウのヒナやニホンザリガニなど、絶滅のおそれがある種を含む)が食べつくされたり、ミンクと似た食性や習性を持つ他の生物(同じイタチ科の動物など)が、餌やすみかを奪われたりするなど、生態系に大きな影響をおよぼすと心配されています。

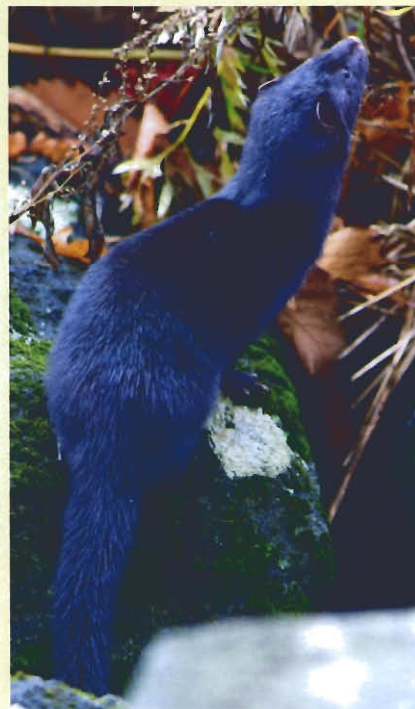
アメリカミンク (*Mustela vison*)

北アメリカ原産のイタチの仲間(ネコ目イタチ科)です。体重は1kg前後で、細長い胴体に短い足、細長い尾を持っています。

川や湖の岸辺や海岸など水辺を好み、木や岩などの下にいくつかの巣穴を作ります。大変泳ぎがうまく、魚やカエル、ザリガニなどをもぐって捕まえるほか、小鳥、ネズミ類なども食べます。

丈夫でしかも美しい毛を持つため毛皮用に多数飼育され、さまざまな毛色の品種が作り出されました。

もともと日本にはいなかった動物ですが、毛皮生産のために輸入され、養殖場で飼われていたものが逃げたり捨てられたりして、北海道や長野県などで野生化しています。



〔写真(部分): 神義光氏〕

ミンク調査報告会の開催

平成22年3月27日(土)に、KIWC技術委員会の主催によるミンク調査の報告会「釧路地域のミンクと外来種」を釧路市生涯学習センターで開催しました。アンケート調査の協力者や、湿地とかかわる機会の多い自然愛好家、関係者など約80名が参加しました。

報告会では、2009年に実施した「釧路地域のラムサール登録湿地を中心とするミンク生息状況調査」の概要紹介に続き、技術委員の河原淳・霧多布湿原センター館長からミンクを含むイタチ科外来種の現状について解説していただきました。

この後、参加者との意見交換会が行われ、新庄久志・主任技術委員の進行により、調査結果をふまえ、ミンクを含む地域の外来種と今後どのようにつきあっていくべきかを話し合いましたが、辻井達一技術委員長・(財)北海道環境財団理事長からコメントいただくほか、参加者からも活発な意見が寄せられました。

会場には調査中に提供されたミンクの写真や、ミンクを含むイタチ科動物などの剥製、ミンク製品なども展示され、参加者の関心を集めました。



技術委員会報告書、ミンクリーフレットの発行



KIWC技術委員会は、2007年度から2009年度までの活動を、「湿地生態系にかかわる外来種」に関する調査研究報告書としてまとめ、2010年3月に発行しました。内容は2009年に実施した「釧路地域のラムサール登録湿地を中心とするミンク生息状況調査」の詳細な報告をはじめとして、釧路地域の湿地における代表的な外来生物の現状と問題、対策等で、各委員が執筆しました。自然保護団体や関係する行政機関等に配布したほか、希望者には無料(送料別)でお分けしています(入手方法については事務局にお問い合わせください)。

また、調査で得られた成果をもとに、釧路地域のミンクに関するリーフレットもあわせて発行しました。ミンクの生態や分布のほか、釧路地域への導入の経緯や被害の実態など、外来種問題を考える資料として学校や子供向けのイベントでも利用できるようなイラストや写真を多数掲載し、一般向けの内容にしました。関係機関等へ無料配布するほか、環境イベント等でも教育資料として活用していきます。

環境問題セミナー「EUの環境政策と気候変動対策」の共催

2010年2月19日(金)、環境省釧路自然環境事務と釧路国際ウェットランドセンターの共催による環境問題セミナー「欧州連合(EU)の環境政策と気候変動対策」が釧路市観光国際交流センターで開催されました。このセミナーは、地球温暖化対策の先進地ヨーロッパで欧州連合が主導して行っている環境政策について、欧州委員会駐日代表部の一等書記官ジュリー・レナルさんに講演していただいたものです。レナルさんは、フランスのニース大学法学部やソルボンヌ大学院法学部で学ばれ、欧州連合でも法律の専門家として活躍されるとともに、気候変動に関する国際交渉や欧州気候変動政策等に從事してこられました。

講演では、欧州連合の環境政策の現状と気候変動、生物多様性、廃棄物対策、国際会議の内容など、一般参加者にも分かりやすく解説されたほか、地球温暖化対策のために、森林や湿地を守っていく重要性も呼びかけていました。



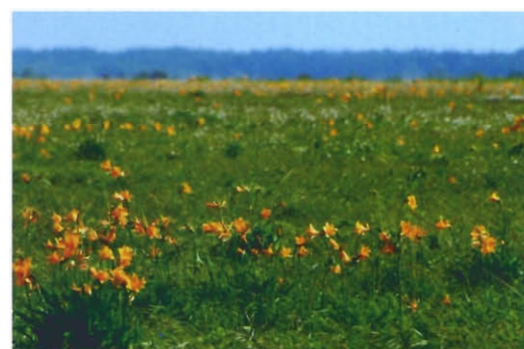
日本のラムサール条約登録湿地 シリーズ18 ～(北海道)～サロベツ湿原

北海道北部に位置するサロベツ原野は、稚内市・豊富町・幌延町にまたがり、雄大な利尻山を背景にした広大な湿原は、低地における高層湿原としては日本最大の規模をほこります。ミズゴケを主体とする高層湿原域を中心に、中間湿原・低層湿原が広がり、その周囲を「サロベツ」の語源(アイヌ語で「蘆原を流れる川」という意味)となったサロベツ川が流れているのが特徴で、海岸線には数千年の時をかけて砂丘上に成立した森林が南北に25km以上も連なり、原生的な森の中には大小100以上の湖沼があります。このような豊かで変化に富んだ自然環境は学術的にも貴重で、利尻礼文サロベツ国立公園に指定されています。

春、沼の氷がとけるのに合わせて、数千羽のガン・カモ類が南から渡ってきます。湿原の中央部のペンケ沼は水鳥の繁殖地、渡り鳥の中継地として非常に重要で、オオヒシクイ・コハクチョウの東アジア地域個体群の個体数の1%を定期的に支えています。さらに近年はタンチョウも繁殖のために飛来しています。木道に目を移すとコモチカナヘビが見られ、地平線までエゾカンゾウやワタスゲに埋め尽くされた原野には、今では珍しくなってしまったシマアオジの美しいさえずりが響きます。青々とした草の下ではトウキョウトガリネズミも活発に活動をしているはずです。やがて夏から秋へと季節は移り変わり、原野は黄金色に変わり、北からガン・カモ類が再び渡ってくると、冬はもうすぐです。大地が白一色に覆われる頃、オジロワシ・オオワシが空を悠々と舞います。

サロベツ原野は、戦後の大規模開発の影響で湿原面積が大幅に減少し、現在も乾燥化が進んでいます。こうした状況を踏まえ、平成16年からは上サロベツ自然再生協議会が設立され、行政と民間が一体となった各種の保全活動や、学校現場との連携が始まっています。湿原と酪農の共存を図り、この素晴らしい財産を次世代に引き継いでいくことが、私たちの大きな目標です。

(文・写真 NPO法人サロベツ・エコネットワーク)



JICA 2009年度湿地保全研修・新規コースの実施

2009年5月18日(月)から6月29日(月)まで、JICA(国際協力機構)・帯広国際センターによる集団研修「ラムサール条約・生物多様性条約に係る湿地の保全と利用」を受託し、4名の研修員を受け入れました。

これは環境省主管によるJICA研修で、途上国の自然保護政策担当者や自然保護官などを対象として今年度より始まったものです。湿地の保全と賢明な利用の推進のために研修員が所属する組織の課題を整理し、3年間で解決策となる具体的な事業案を企画し、実施することを目標としています。今回の研修にはマレーシア・サバ州の国立公園管理に従事する州政府職員2名と、モンゴルより湿地保全を担当する自然環境・観光省職員2名が参加しました。

研修は東京近郊、富士吉田、沖縄、釧路の4つの地域で行われました。ラムサール条約・生物多様性の理念に基づく湿地の保全や、特に環境教育や観光の素材としての湿地利用、日本における制度整備や普及啓発施設の運営、官民による普及啓発やエコツアー等の事例を、講義・視察・実習を通じて学びました。研修最終日のレポート発表会では、湿地保全に係る利害関係者によるワーキンググループの構築や地域住民向けの普及啓発活動など、研修で学んだ知識や経験を活かした事業案が研修員から発表されました。また研修期間中には実習・視察やホームビジットなどの行事を通じて、小学生・高校生や国際交流のボランティアと交流する機会もありました。「日本の子供達の環境意識の高さや、ボランティアの人々の親切に感動した」と、参加した研修員全員が感想を寄せていました。



JICA 2009年度エコツアー研修の実施

2009年9月7日(月)から10月13日(火)まで、JICA(国際協力機構)集団研修「自然公園の管理・運営と利用(エコツアー)」研修が、JICA帯広国際センターを研修実施機関、KIWCを受け入れ機関として実施されました。5か年にわたり実施されてきたこの研修コースの最終年度となる今年度は、3か国(アルゼンチン、ラオス、ウガンダ)から国立公園の運営や観光振興に関わる中堅行政官5名が参加しました。

地域の自然・文化資源を保全しつつ、持続的に活用する地域開発手法のひとつとして近年注目されている「エコツアー」を自国で推進するため、研修員は理論・法整備等の講義や自然公園の視察、東北北海道の豊かな自然や漁業・酪農などの既存産業を活用したツアーの体験実習など、多彩なプログラムを通じてエコツアーに関するさまざまな知識を学びました。これらの経験をふまえ、コースリーダー(研修全般の指導者)の助言や、研修中に行われた講師・仲間とのディスカッションをもとに整理し、「アクションプラン」を作成して最終日に発表しました。

野外研修が多くスケジュールもきつい1ヶ月半でしたが、ホームビジットなどの交流プログラムで地域の人々の温かいもてなしを受けたり、小学校での環境教育プログラムで子供達とともに実習を行うなど、住民との交流を通じて、研修員は大使の役も買っていました。



JICA 2009年度住民参加型自然環境保全研修の実施

2009年10月26日(月)から11月12日(木)まで、モンゴルを対象としたJICA(国際協力機構)集団研修「住民参加型自然環境保全」研修が実施されました。

ラムサール登録湿地・ウギノール(ノール:湖の意)湖畔には、JICAによる「集水域管理モデルプロジェクト」の一環として、このたび来訪者向けのインフォメーションセンターと地域住民活動用施設が完成したばかりです。このプロジェクトの関連協力事業として施設を運営する人材の育成を担う研修も2007年から始まり、いよいよ今回が最終年となりました。研修にはすでにスタッフとしてセンターの企画運営を行っている地域関係者と、これらの活動を行政面で支援する役割を担う国・地方自治体担当者の計4名が参加しました。

研修では、道東の国立公園やラムサール登録湿地の自然系施設で、地域のエコツアーや環境教育活動を行っている民間団体等の事例を参考に、視察や体験実習を行いながら、施設展示の手法や、地域住民への普及啓発や協働推進に必要な知識などを学びました。研修員は全員女性ということもありチームワーク抜群で、学習意欲や研究心も大変高く、研修最終日の報告会では、吸収した知識をそれぞれの立場でどのように活かしていくか、具体的で実証的な提案を発表するなど、帰国後の実践活動に期待を持たせました。



お知らせ

釧路国際ウェットランドセンター事務局は、平成22年4月1日から釧路市役所1階の市民環境部環境保全課内(市庁舎正面玄関から入って左側)に移動しました。なお、電話・FAX番号、E-mailアドレスは変更ありません。